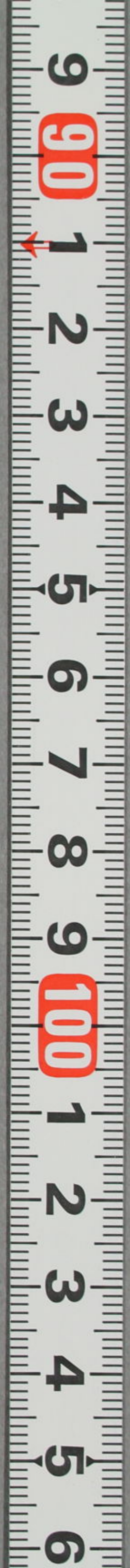


俳諧七部集

下

5
4118
2



續猿蓑



八九乃 衣をく 雨降る 柳の影

芭蕉

まきのうらみすの 畠 あり 越え

祐圃

初宿る 馬子しこのれ 初秋きて

馬茂

内とせさつく 映のゆき

里圃

きのようじ日ぬるる 月の色

祐

狗脊くぬく 肌をくちり

蕉

法柿とこし 風小吹れり

里

孫々ゆき 祖又乃 借後

芭

服指ふ 髪を 髪刀

蕉

煤とまきく 中 録の 履

祐

約束の小鳥一さけ 妻ふき

芭蕉

十里とくろふ 余所へ 出る

里

笹の葉やん 少頃 埋て 朽り

作

河の海く川たて 門の書つけ

芭

山くくう 夜と 河 流き 揚塔を

里

やうとく 中へ 出ん 高れ 道つれ

芭

宵宿よ おくく 花の 多て あひて

芭

アノのふきく 小 敷乃 人

芭

まきやま 山 麓 杖の 杖 左 丈

里

伊勢の 下 向ふ 魚の こと 是

芭

長持よ 小 傘乃 仲る 人

芭

くろくろ こと 人の 影る さま 雲

芭

緋寺ふ一日あきふ砂乃上
概の角乃くくぬ栗丸
炭出一の牛に張とくや
ちれぬ眠うとくくは内院
内侍の侍中栗丸のくちま
餅乃の菓乃の名栗さくぬし
せれてもく栗も枝もむくは
俣傍とくくちかすれり
部やうにそか坂乃栗の風
すぬくは栗丸のくちま
引まき栗丸栗丸のくちま
そ川く火入よおくれ栗

里 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺

花とくや枝ぬまの栗丸
漱りくらのぼるかちまの栗

苺 里

雀の字や枝をばつるの栗
くく栗の岸の柳りちま月
立家と栗丸のくちま
ぬりくちまのくちま
栗丸の栗丸の栗丸
栗とまいて栗の洗足
悔くくくの一歩の栗丸
法杖とくちまの栗丸

馬 苺
苺 里 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺

よよときさるる多事あれ方執きつら
まろつり去るる玉さ乃乃岩
何るすもあつてめくとき野に
風ふも次つら子箱の秋の月
ま屋所秋の夜あつてはへて
な屋所乃むむとこ女房呼りり
明とつる伴勢の幸海の年を
著と去つてこれとつらぬ一
信年も去つてまきさつらぬ
来静ある年乃乃條纏
常乃乃乃ハ言と挿残
志あぬ合とつとつらつてあ

里 葛 沾 里 葛 沾 里 葛 沾 里 葛 沾 里 葛 沾

よよときさるる多事あれ方執きつら
まろつり去るる玉さ乃乃岩
何るすもあつてめくとき野に
風ふも次つら子箱の秋の月
ま屋所秋の夜あつてはへて
な屋所乃むむとこ女房呼りり
明とつる伴勢の幸海の年を
著と去つてこれとつらぬ一
信年も去つてまきさつらぬ
来静ある年乃乃條纏
常乃乃乃ハ言と挿残
志あぬ合とつとつらつてあ

里 葛 沾 里 葛 沾 里 葛 沾 里 葛 沾 里 葛 沾

並のまねて懐子附のやうにお
実と氣味よき杉苗乃風
花れうけ草をまねて懐子の
あゝ田の土乃かりくうけふ

里 沾 苺

以てまねて懐子附のやうにお
此れまねて乃まねたう花
大根のまねてぬまうけれて
と下ともよね柔のむ秋
町切ふ月又の日の集り砂
あゝあゝくくと通るる次

里 沾 馬 苺 沾 圃
里 沾

智恵飛の習うれ鳴極うて
法ううれはれを楓のあやう
姐の舞ふあをさうけなう
月利てゝあをさうけなう
物のおをを強何の強御結も
まて七川あをさうけなう
草のあをさうけなう
伊勢のあをさうけなう
うきと敵と懸てつれを海うき
あゝあゝくくと通るる次
家舟の花の中よりけつとあゝ
柳の傍へ門をまねてりり

里 沾 苺 里 沾 苺 里 沾 苺 里 沾 苺

百好のなつてきるもあまのこ
こまのそと様より先行草
傍地の法身つてとありし金
くふのあつたさきとつとせぬ
砂と遠く小蘇の中の絡線キの
別と人々ひひかせは注
火煙の火つけと様をきかせ
一石のゆき一石乃 采
おししハ実月の起る天草
仰よか減のらうよおをさ
月影まこくくあまことあま
おのひのちん甲指を宿く

里 沾 芝 里 沾 芝 里 沾 芝 里 沾 芝

多排小娘と帯めて娘めさ
とあつたふらんとつて仕ま
君のあつた郷のさつとあり
寺のひけさる山陰のさ
あつたさきとつとありし注
一 五 澤 くとあつた風

里 沾 芝 里 沾 芝

猿蓑よりねらるあれねあつ
日とさきりれし群やる
水かきく注の年よりあつて
後行しし公案とつて

沾圃
昔蓬
支考
惟然

田家

藟弱乃石枿やんや梅様
咲けりる花や飯米も十石
山には花はあけし一木あり
なうれ木の根やあけず花の影
花はまきまきと似合す人々流
るれやんを床をさるるのま
ぬりぬれぬきのまらうや朝の花
一りさつたふのあけやりゆり寺
八まねくあけりゆりまきまき

若菜

湯船や若菜をかりし去りし

本皇
桃首
一桐
如雪
其角
一年
阜盛
沾圃
全
鼠

東の端やむ畑のまきまき
夕は乃 影まきまき
一かぬ乃 牡丹まきまき

梅 竹 竹

まきまきくらのまきの小内と梅
まきまきふや入五相もむ先の花
寺梅乃あまの葉まき牡丹まき
里梅小根まきくやまき先の花
投入や梅のまきまき梅のまき
梅のまきまきく梅のまきまき
あけしつた梅のまきまき梅の
梅のまきまき下詰の

曲翠
孤屋
尾頭
芭蕉
地水
其角
昌彦
良品
万寺
奠日

あゝ杜やたゞ一ふ家もあつた
大丹 千川

天神のやうな道

身ははげしくおるや梅乃の露まきハ
遊糸

そらく乃藤のちうや梅柳
千那

何く豊ふあふらう川やふと
三光

らくつをを教へらうや古柳
李田

まを柳の黒くはくまやる此曲
九光

梅をうけくる来通る柳ハ
巴走

るま 附真

さふそ刀かひ氣塵う宙
其角

うくいこや柳を藤の風をあり
史報

さうにちりて休むむかう
智月

さや柳のうらうら敷のま
芭蕉

深さうもあつてけと紙のやう
三木

まを面や 葉子にけす人 遊糸は
西堂

弱まれば月のまをらん 花は
傘下

こゆまのまふ似合き白紙
長虹

燕や田とわらうら馬のあや
妙童

葉は片や身もさう細くおや燕
峯丸

雀子や始よりいひ 歌の柱
槐市

蠅くらしふあつて春のふ柳外
何歌

り鴨やあ風まつれその夜端
弥幕

芳母何乃遊

物のいふころれ里まける母猫ニ 巳百

白日まのり也

やちうても翅を動く胡蝶片 柳梅

衣文を忘のうさのやまをいぼの網 雅然

薄の舞あつる核よりうさな 周拈

風吹よ舞の出事より小蝶亦 香

豆の腹くち花よせり出た際外 聖意

春鹿

始あつてや度非く春の角 以雅

美耕

妙福のまき名あしきさうの麻 木山

苗れや金邊をふれ月月取 けい

千刈乃田とあつるあつる散人 一筆

桃 附椿

白桃や志川くもさるにあのみ 枕隣

今も梅とすまの事さうり花のそ花 分我

仿えうやそあ花の上乃事花のそ 雪其

梅さの各中まよふ事せんりの花 水幽

まよさう小桃や春舞妓の服躍 其角

に東の事由の祖又の懐雨の法さふ

おのく段文歌のむらふ池の光明と 角上

小服紗の光をやとせ玉つとさこ 残香

袴の袴くまはな花吹袴の形 湘木

ふれあひくつるや袴のそとの宛

一乃松の... 土芳
 一乃松の... 配力
 一乃松の... 万手
 一乃松の... 昔菰
 一乃松の... 均水
 一乃松の... 正秀
 一乃松の... 仙化
 一乃松の... 文信
 一乃松の... 素考
 一乃松の... 武仙

延道ハ... 百家
 延道ハ... 尚白
 延道ハ... 園落
 延道ハ... 山峰
 延道ハ... 千川
 延道ハ... 芭蕉
 延道ハ... 其角
 延道ハ... 武靈
 延道ハ... 去来
 延道ハ... 古芳

くしのまきやう、はてする空網法
其の年終をさうけく
凡胎

元日やうと片やう此事母乃花
猿雖

子れあきやうの無敵や花ひきき
葛草

脊きうと物小物とんやと花う云
母を

齒肉乃るあひ又子包度此鯛乃る
耕雪

鯨乃る筆のきとんをやう初日代
九柳

く川まきやう年とる後白は元
前川

枇杷乃るあひ乃れ性く和くあ
斜嶺

世乃る業や整とあれも若夷
山蜂

湯つりや大かきけの初日代
任行

元日や魚とさうとあき楯乃る器
竹戸

ふ十とさうとに焼すえよりり
是糸
梅栗や餅と長とくれとの志を
沾圃
魚かきとらうの目かきとるのき
圃角

夏之部

郭公

曉乃る雷とさうとやうとま
其角

法とあき啼や泣きあきとく
夫州

去り候やあきをよみふやうま
君良

蜀唄啼あき白く朝終山
支考

吟唄のあきやせうとあきま
如雪

燕の飛あきとさうとあきま
芦舟

淀よりも勢田をあけり〜子規

はるを石山の林蔭をへ頼我の吟して通りかへ

郭公かきふのあしを中や〜り 沾圃

木附草花

橙や日にこあれ〜ら友とあま 園指

里〜の改めり〜ぬ友とあま〜ら 母萩

園中 二首

け中乃吉まきつれ柳乃花 此筋

手切のやまも柿の葉もあま 千川

姫百合や上よりさあか蛛の糸 素菫

題山家〜百合

あ〜中やうま〜と〜る百合の花 文考

山りえ〜のうれ〜や 杜若 尾頭

冷け〜のうれ〜ら 杜若 沾圃

友菊やあまの花ハ先〜さ〜 拙候

〜のうれ〜ら 拙候

〜のうれ〜ら 拙候

夕影や碑〜く不出れ空の完 芭蕉

夕影や碑〜く不出れ空の完 芭蕉

藤の花とら〜く〜ら入に〜ら 瑞香

藤の花とら〜く〜ら入に〜ら 瑞香

蓮の花とら〜く〜ら入に〜ら 白雪

蓮の花とら〜く〜ら入に〜ら 白雪

客あ〜〜ら蓮の蠅お〜ら 良不

瓜

新玉のふくらみ種を涼し瓜の玉
那知もや種を入るもそくくん
至曉

わん

桑おある。種を出されぬ牡丹外
瓜強

早苗

糸入やき羽乃田種乃ゆる中
邦七

早乙女よ結んくや△の笠の紐
園指

ゆらるる月の種おうれる早苗外
魚日

田植奇よくやる親の御心世し
まら

一田りのゆめくくやあ乃者
少枝

里の子ら燕握る早苗くう那
支考

螢

蚊を火の煙ふくくあくく外
許六

之日月にま乃螢を明くう
母萩

納涼

涼しきや竹物うけあつて心
半残

き花菓や度々あひひふ久涼
惟然

涼川の菴よあひひ

くまふはあふや風あふうらけ新涼
史邦

涼しきやあふあふの縄をうら
を愛

石ぬりや裏門明くく夕涼み
牡羊

漫真 三句

涼しきや牛乳尾振て川の中
万守

腰うけく中小凍 昔遊子の那
凍しとて掃くは是を掃くはける
しを掃くは掃らるるを掃くは
よる風の出るはしとて掃くはける
以てしとて掃くは掃らるるを掃くは
よる風の出るはしとて掃くはける
黙然とて掃くは掃らるるを掃くは
穢人不惟子とて掃くはける
凍しとて掃くは掃らるるを掃くは
掃くは掃らるるを掃くは

聖文

酒堂
支考
名是
遊可
全
去来
正秀
上芳
我眉
里圃

かゝるや照りかきし屋の隅
李 聖文のつとて掃くは掃らるるを掃くは

教医者乃以字を授けしは是を授けし

山実のつとて掃くは掃らるるを掃くは
丸幕の内乃あつとて掃くは掃らるるを掃くは
燦さるる。日 聖文のつとて掃くは掃らるるを掃くは
茨ゆ小極も志すはぬ是者り那
葉乃のつとて掃くは掃らるるを掃くは
何るそ日や三扇とて掃くは掃らるるを掃くは
積あけとて掃くは掃らるるを掃くは
積あけとて掃くは掃らるるを掃くは
積あけとて掃くは掃らるるを掃くは
積あけとて掃くは掃らるるを掃くは

聖文
正秀
乙羽
怒風
素鏡
赤峰
卓象
里東
沾圃

弁乃子

白雨や中庭をくぐりて 蝉乃初

可誠

五月雨 附夕五

あしつゆやまきくもちりて 微雨の中

不王

ささくれや 螢火の葉乃 畑

芭菴

五月雨や 睡むれぬ 残つて

沾圃

夕まふささく 合りり日 傘

松候

白雨や 蓮乃 多きく 池乃 芳

芭菴

夕まふささく 合りり日 傘

曉鳥

ゆつとらふ 傘 くる 家やま 一所

圃水

白雨や中庭をくぐりて 蝉乃初

正秀乃

まきのとまきく 啼くまきり 蟬のまき

胡故

妻乃 蟬乃 鳴き 初や 池乃 芳

乙州

蝉啼や ぬの 織る 窓の 暮る 樹乃

曉鳥

夕乃 月や 池乃 多きく 池乃 芳

兼拾

雜文

庭乃 暮る 夕乃 動や 池乃 芳

杉風

虫乃 吟や 夕乃 暮る 池乃 芳

荆口

夕乃 暮る 夕乃 暮る 池乃 芳

如真

川 持よへて

志乃 焼や 暮る 夕乃 暮る 池乃 芳

文鳥

其のまに家りちりく本や國の空蘇
夕園之りるもちりや酒ぐや
其野

魚何ある幸も何れ浩ららと
三光

林やまや荒かむく日乃面
重翠

沢海や道分りゆる雨のあ
秋を

蝸牛 流の川反乃るまを
水函

晋乃洞明さくくやむ

窓形小るる林乃る屋や台草
其成

新ころふ惟子切つるまを
惟然

名を傳のくくく之の乃るまを
あそくよくしあふにまの納海ハ

扇フナサテ世よふ文

惟子乃杯ふとをんし流五百
支考

秋之部

名月

名月は林麻の考や田乃くり
其成

名月の名をくちてて棉留

こくくハ修史の中サテ名月の考この三
とカクサテその考見つれぬ人となり

一はけりわらうく月をその考見ハ

その考りちる考あふは初國の考の中

園位わらうの考りちる考一林を考考

ありあけく平田賦く星のくを老楚
 守中とのこけりていふさうさうさう
 その次乃棉をけさるる舞内して心をか
 やすりひり今乃このむ所の一筋は候あは
 月乃うらゝめやハたるひりさ花とりい
 斗りくおひさうくはたは清香あり月
 に法ありて是も待きりりりりりりハ
 前ハ寂寞さむさう後ハ風鳥さうり
 うらゝん昔くく何と是地とくくさ
 かもむく後乃人か候あはし 支考評
 名月乃海より冷も田葉の那 酒堂

月やあまの月ハ般屋の月 如行
 月のく乃を根とて月見ハ 露沾
 月乃あまのさかひやせん月の 智月
 名月やまを法の法と人のめり 園指
 月乃や文科よりのやまり雲 涼糸
 月乃や灰吹持る法もやう 不玉
 中切の糸と糸のつく内さ 砥刀
 名月や草のくくく白き花 花柄
 月乃や遠くのねふ人もさ 圃亦
 ねる気もあきてるやや月 山嶺
 月乃や花のまよハ門志らん 凡国
 名乃や四五人葉一 罽如杯 雲矣

老の牙をとて育乃月も内てむ
明内よかられ 星れあふれし
正秀

い勢乃山田ふあつて勢乃月とまひ
まろの月

二又すこゝ居れよあつぬ月又外
芥子菊と細まゝの月又外
柳の冬れよ助く月又外
山多れらつとも居ぬ山峯の月
名内や里乃ふむひ乃まき宗
場に居く内又たつて越棧
内月やおまけし月き女外
海とやおもひろりぬ夜の道
支考
空牙
如真
宗比
木枝
利合
丹瓶
野菰

飛入乃客ふまき乃内は
正秀

浪川のわつらよ日とくつて

舟川乃乃つてよけて月又外
伝も月乃月ふさふさや定勢柳
宗比

秘して伝く作りしをまひあつて

壙持と園小のあつてやうふ乃月
空おまきく月入あつて掘りあひ
昔うつら月やうつらぬ楮外
月新や海乃まきまき下
沽圃
馬荒
里東
牧童

深川の未あつてつらな月とまひ

川上とこの川志もや月乃友
芭蕉

十六夜をわづらふに園乃柳外
いさよひの園のちもなすももの花
稗維 全

七夕

文也やあ由の上のあ由の河
星合をそえ無く流れぬく
涼葉
船形りの雲志をくくや布一の秋
東御
あまをくくといふあまの神よまよま
乙州
秋風や薰姫乃園もら

立秋

粟ぬらや庭より片よを秋
栗川
秋の川や中よ吹くも雲の奉
九次
檀草

秋の夜のた透通の格枝外
柳梅
柳の木のた透通の格枝外
柳友
妙前も花おひぬ馬骨の姿外
酒子
とくたのくく格枝の外よあがれぬ
鳥栗
一は助をくくた舟よあがれぬ
支浪
弓園もくくた舟よあがれぬ
支浪

芭蕉庵

百人合も色まはさ容と鏡る余外
風麦
ちよ姫のた透通の格枝外
史邦
枯のた透通の格枝外
万乎
新瓦や層のた透通の格枝外
芭蕉
新瓦のた透通の格枝外
至曉

おろしや雨戸にこゝろ萩の了急
苔れあふやあらし動く秋の風
中人乃るまを遊を志くれ苔らう
月あらし長く魚らり苔らう
おろしや
おろしやの蒼うそへすは月秋
あさうふの遠くて志くを柳に
あらしおろしあらしの湯の舟
おろしは志られ一人や笠帽子

虫 附鳥

雪芝
荷兮
桃妖
松下
里尼
園指
風妻
其角
可南
北枝

火乃沸く胸まきうらうらあし乃あう
秋乃秋や夏と秋とときらひあう
この虫や形は似合し月の影
蜻蛉や何乃味ある半乃先
蜘蛛切後をひやとら石井と
蓮のうま物さうらうの輝めを
ぬかうらうらあらしかき秋のせき
あらしの虫はゆき浦乃苔屋に
蜻蛉やまきりあらしの川系
粟の穂と見えあらしや峰鶴
老乃あらしとあらし四十雀

秋風

正秀
水崎
杜若
探丸
葛帯
水峯
赤草
馬寛
氷固
支考
芭蕉

秋の勢や二番だてこのほそを舟
雀子の乃 勢もよきや秋の風
のありとわらうらうら秋の風
松乃葉や海はよも秋の空
よのうらうら草乃志もあへて舟も
ゆふのや舟もよきや舟もよき
あはれしてあはれ舟の舟もよき

菰妻

ひらひらとあそぶと舟もよき
菰妻や舟もよき舟もよき
舟のや舟もよき舟もよき
舟のや舟もよき舟もよき

遊刀 式之 支考 風圃 圃蘇 九長 穢雞

東

京院

出芳

芭蕉

木實 附 菰

固栗乃 舟もよき舟もよき
岸の境に法樹たのむはうら
秋のや日あそぶ舟もよき
舟のや舟もよき舟もよき
舟のや舟もよき舟もよき

為省 志鹿 洒堂 色聖 仙圃

舟もよき舟もよき

舟もよき舟もよき舟もよき

惟然

舟もよき舟もよき

舟もよき舟もよき

舟もよき舟もよき舟もよき

芭蕉

楓

後庭乃 曉はもれりう村らふ

山麴

桑

尻より ぬれぬぬの 奪也 風の音

以腫

も 縁かつら ぬれぬぬの 奪也 風の音

一酔

曲根業

起し ぬれぬぬの 奪也 風の音

車庸

本 ぬれぬぬの 奪也 風の音

貫山

さゆり ぬれぬぬの 奪也 風の音

如壁

ぬれぬぬの 奪也 風の音

芭蕉

早稲 ぬれぬぬの 奪也 風の音

乃於

山雀乃 やまぐさの 啼き ぬれぬぬの

斗徒

一 ぬれぬぬの 奪也 風の音

支考

ぬれぬぬの 奪也 風の音

全

百 ぬれぬぬの 奪也 風の音

惟然

大 ぬれぬぬの 奪也 風の音

本言

子 ぬれぬぬの 奪也 風の音

佑圃

その ぬれぬぬの 奪也 風の音

佑圃

菊

公 ぬれぬぬの 奪也 風の音

昔草

子 ぬれぬぬの 奪也 風の音

濁子

者 ぬれぬぬの 奪也 風の音

支考

歌 笛 屏

可くくくくくやあはる山嶺の道のみさ

兀峯
夫草

暮 秋

度はや春負うそはる秋のそ
り秋と鼓う乃糸の恨のぬ
り秋やまをひるけは栗のい

母あ
乙刈
芭蕉

雜 秋

五六十はあはれおやて般ハセツ
栗かしれおあゆし重松の中
あしきれ舞きお進つておきお
あはれやまおれ付物。秋の雨

之乃
圃友
畦止
口友

夕ぬくひのよあはれこりて鞠のぬ
文のあや 稲とく家乃あゆま
柳乃あゆた 鼓を感へんあはる

秋子
万平
来門
家波

なるを馬う宅は鼓奏するの笛鼓
とるあはれ秋のそよと雪は舞其
の登よりけりうまはれん生あはるよハ
あはれしハこのあはるひは殊あはるや
かの鶺鴒と松とてははるあはる
とつてこのも只この生あはるま
さるくこの

稲つあやうふ乃中くうら
為乃積

とせ派

あし部

附表

この以乃極乃枝月やいし月
 去れも又松尾乃只とつん
 久ふこころ人も年と水初付
 一時由さくころりとも日
 初しこれ小隅の草乃賣か減
 平揮ふみ及田らりる付
 紫賣や以く志これ乃或廻
 梳賣もあよ芳舞の初付
 完徳乃あくと引込付
 文もあや流よるる

此坡 少枝 昔葉 考治 三茂 中野 園務 空牙 西有 結口

石小並く番婦をぬる
 柳白す日未もや
 うるより志これく
 浮きまをらるる
 伸あ乃松月く
 と川
 花
 支考

此表 露川 里圃 估圃 水鏡

菊園之遊

予宿乃宴と林可月乃
 竹る夏ハとの花いす

なほ清く咲やいそからりの水仙花
水仙乃り花のこゝれで教習せ
水圃 惟然

范蠡と越南の古名に
山家集乃類よおよ

一、花もこやとぬ氣の氷うね
と云 車座

山茶花をえより用くゆり花
車座 志芳

色移のひらひらやもれ
志芳 高生

ゆき糸の 花やもれ散り
高生 志芳

木と葉 附み松風
志芳 高生

物のひふり 木乃葉なり
志芳 高生

早もつて水の船も
志芳 高生

みづ川や木の葉をまき
志芳 高生

林葉よりまきさりりよき木乃葉ハ
秋風

木乃葉は乃り木とく
一、道

とらるよりけりかくらるる葉の
杉風

枯をくもあふしりやと
杉風 蕨

牛のけり乃を枯母の
蕨 乃

あつ枯よまききく
乃 利平

草枯よまききく
利平 支考

舟を枯くのもんお
支考 智月

木切りや色雨
智月 風介

風や春中やうき牛の
風介 惟結

木枯や刈田乃時乃
惟結 塵生

こわしやまきさりり牛の角
塵生

夷漢

名ひす漢 砂 夢 小 幹 是 せ たり
鳥 附いせ

芭蕉 利合

鳥 附いせ

産 漢 亦 多 ぬ 日 也 一 浦 野

白空

進 け け 意 子 ころ 小 子 多 小

芭蕉

小 秋 ち ち 申 申 ち ち 申 申 申 申

大草

入 海 也 旋 の 笠 又 帰 不 多 多

園松

撃 又 け け け け け け け け け け

芭蕉

之 川 鴨 と 大 進 々 々 々 々 々 々 々

乍木

吸 吐 又 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

利登

海内子文

車馬

透 や 子 ね ひ め の 水

岱水

一 枝 亦 初 白 魚 也 古 此 前

杉風

如 妙 川 也 後 々 々 々 々 々 々 々

拙候

社 丈 魚 之 何 脈 の 丈 々 々 々 々 々 々

越 又 川 子 の 丈 々 々 々 々 々 々 々

吾月 附食

喰 之 の 也 門 々 々 々 々 々 々 々

里圃

あ 一 猫 亦 け け け け け け け け

大草

何 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

小春

亦 他 也 門 々 々 々 々 々 々 々 々

麦考

益人よあつたての事あり年のれ
余子よ移りてんことのおまの年忘
閑しに藤所や来ぬ年の中
昔季よや弱りてゆる教の中
昔季よの拍子よぬん明を
裁居りよ来の子よらさぬ祀
一ちよと時て静りて除秋の路

雑み

小屏風よの事を挽くよをささ
極竹よの風よの年一尺の端
井乃よのあつたての事あり年のれ
多き事や山伏村の昔に

葛 古考 土芳 尚白 桃後 山峰 利合

斜嵐 土芳 李下 仙杖

火煙より森よの影をささ
山陰や猿の尻振り向
祖板よ人參の根のささ
菊刈や冬よの事あり年のれ
釈教の部 附追昔 哀傷

涅槃

涅槃の像ありての事あり年のれ
移りてん今や鰻の合の味救の善
山寺や猫守りて居る移りてん像
貧福の事ありての事あり年のれ
灌佛

山峰 不撒 芭蕉 浄圃

團仙 雲々 二谷 浄圃 猿

灌仏やほりあつぬる丹丸のやぬ
若死や佛うまされて二三日
灌佛や釈迦と持慶徒出

三鬼祭

喰物もいふあつて一掃うつり
森のまのかりのしやうき魂を
やほ伏や坊主をやふまうつり

甲戌の夏大具は作しとるあいの
いふつうの消息をいれかたは里
ゆりてき命をいふまむとて

家もいふ杖も走し秋の暮を
悼少年 二五 甚哉

うみくさや麻本の空をわすれぬ
この秋を走らぬうの子ハ秋の風

うみくさこれ秋の寺ふ訪く
首のうみくさ稲すめのもよそのの
くうとあや稲書やふ桶のあ

秋の柳もいふあつては秋の
臘八 作圃

賜とささうていふれを納むけ
何のあれかのあれりうま大脚禪
如行

雑歌
ゆきのまじり雪のうていふまじり如行

岡山の舟

涼しくも舟のりつるも舟ハ

去来

みよるとやいそ二おごりけり

替月

ク一知やうりちのすけし佛也

乙明

よのふま川越向や早まると

冬梨

ふすまうらぬおのる涼一及念佛

丹波

食堂の雀啼きうターレ

支考

旅之部

送別

え縁七年の遠くを或馬の別とて

妻ぬるに笠をのりやの別

荷子

別るや柳陰をうら板の上

惟然

梓六の女を舟のりし

旅人の立ちのりも似よ推乃

芭蕉

留別

條の惟茲く宅より古き

篇ともをまの茅をこり

夫村

鮎の子の立ち魚送る別

芭蕉

甲斐のこの舟を伝る

舟の山を舟のり

年よりいそ牛又のりたり

木暮

船のりやうら早をうら

越人

みへもわくつわりの舟

舟任

舟の國の舟のり

Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to military or administrative matters, given the use of terms like "regiment" and "company". The handwriting is somewhat faded and difficult to decipher in some places.

Handwritten text in a cursive script, similar to the left page. It includes a prominent heading that reads "The Regiment of..." followed by several lines of text. The script is consistent with the left page, suggesting a continuous narrative or a related document. There are some small stains and marks on the paper, particularly a small red mark near the top left of the text block.

阿羅野

尾陽寺を檀本堂と云ふなり其を阿羅野と云ふ
あら世といふ阿羅野といふ名ありて其を阿羅野と云ふ
阿羅野といふ名も此阿羅野にありて其を阿羅野と云ふ
阿羅野といふ名も此阿羅野にありて其を阿羅野と云ふ
阿羅野といふ名も此阿羅野にありて其を阿羅野と云ふ
阿羅野といふ名も此阿羅野にありて其を阿羅野と云ふ
阿羅野といふ名も此阿羅野にありて其を阿羅野と云ふ
阿羅野といふ名も此阿羅野にありて其を阿羅野と云ふ
阿羅野といふ名も此阿羅野にありて其を阿羅野と云ふ
阿羅野といふ名も此阿羅野にありて其を阿羅野と云ふ
阿羅野といふ名も此阿羅野にありて其を阿羅野と云ふ

文禄二年除生

芭蕉桃青

花三十句

よりのち

こ程きくともこの花は昔山	貞室
あやととよみはるたのあ	好通
花白帯るけはうくこれの林外	信徳
うまは心とことくく之でらまむ	景風
昔淋一花の後乃鬼	友五
山里の管の志ある花は人外	尚白
何れも花の心人乃長	云来

みよの雪をさくしゝ花も雨に
いふのあつのもくひくもるまを
トのふれ空のしるれん花の香
るのふ雪おろくさ枝かきし
又あけしつるもくさるぬ花の
見丹ののいらはらくさるま
らるる花をほめ人しく
冷けよ花もくさるや花の
まらるる花をほめ人しく
あけしつるもくさるぬ花の
連らるる花をほめ人しく

雪水
電泊
紙人
一井
後似
風障
丹泉
胡及
長江
花枝
歩
花

花のよきと花のわるく
心苗
紙人
世の
冬松
冬文
有今
花のよきと花のわるく
あつる人乃山

心苗
紙人
世の
冬松
冬文
有今
花のよきと花のわるく
あつる人乃山

檀の木はくわがさうめりてん 全

杜宇二十句

けしきんを初るもの水たそをりて

るる電け夏月又つて 郭云 李吟

月少きまら糸山をいふ物つ不 素堂

やうりしき中よまきり 蜀院 酒堂

嵐起乃ひきさやけしきん 絳人

形りし子のやうのまらや 樹云 松下

流や先ん其のつて 卅三の郭云 重五

けしきんを初るもの水たそをりて 柳風

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

あつたのしきんを初るもの水たそをりて

うららかに其のくもけりきん

石山

月三十句

あふくと毎のくけり月あは

梅吉

それしも月ある中の福に如

湍水

月ひらけひらけ中らの今や月六

一言

面乃月くてもふし此為あり

越人

さうともふお暇げく月あは

昌碧

屋わさ葉のや月さあや月の新

津市柳

けうくふふ不ふや海も月あは

一髪

とこまうもふと海も月の世中

虫江

味まう 双抱く月あは

任他

一ツ屋やいなをく思ふくふの月

龍洞

名月やいほさあはけさく毎

裁人

あふくと毎のくけり月あは

文麟

あふくと毎のくけり月あは

昌碧

あふくと毎のくけり月あは

傘下

あふくと毎のくけり月あは

二水

あふくと毎のくけり月あは

母也

あふくと毎のくけり月あは

母也

あふくと毎のくけり月あは

持分

あふくと毎のくけり月あは

全

あふくと毎のくけり月あは

玄草

あふくと毎のくけり月あは

胡及

あふくと毎のくけり月あは

西石

雪のふりて橋をさみしや月の影 一巻

十三夜

軽ゆきをふらぬはるる月夜は 杉風

朔日

美らけの月の影をかり海の果 為分

二日

ふる人もたしきき月の夕は 全

三日

何ぞのふらけをぬんるの月 芭蕉

四日

夕月ありんかへさるる心 卜枝

五日

何日とも又さぬはるるやや月の影 泉

六日

銀川をさるるはや月夜は 松声

七日

流るる心もさるる月夜は 一巻

雪二十句

大伴杳々

雪の日や形影よの影乃色 其角

雪の中をむきまをさるるぬすき 芭蕉

竹乃雪をさるる移るる心 塵丈

かきあはるる若花ある山只乃山 加生

車及るもあはるる心 小春

くらふまをそよそよと流すはひたり
 ぼつそらんてう有ぬつみこれ菴外
 七のうけのゆゑもむれ一ツハ
 今きおはるおほくそくろの隈
 雪ほくくる屋よそつる花りぬ
 夜乃雪たそそぬるに枝折人
 ゆされ月や川前斗をそくくと
 秘ちちやけいふきくるの奇羅之
 吾乃江の大舟よりハ小舟一のね
 吾乃船から 鯉こくる声もー
 吾の吾 桂もやりや吾の吾
 あらうしに流るる心 何強級

越人 松芳 二水 危仙 除風 望月 傘下 芳川 冬文 桂夕 若夕

くらふまをそよそよと流すはひたり
 ぼつそらんてう有ぬつみこれ菴外
 七のうけのゆゑもむれ一ツハ
 今きおはるおほくそくろの隈
 雪ほくくる屋よそつる花りぬ
 夜乃雪たそそぬるに枝折人
 ゆされ月や川前斗をそくくと
 秘ちちやけいふきくるの奇羅之
 吾乃江の大舟よりハ小舟一のね
 吾乃船から 鯉こくる声もー
 吾の吾 桂もやりや吾の吾
 あらうしに流るる心 何強級

兼且

二日少寝ぬうかせしふ死の身
 ぬれ人の手からもかきし花の身
 けうあや 九千年乃つとく
 松より伊勢う家賞人ま流
 うあう吾連歌よあしとカ者
 月吾のあまふもあしとカ者
 かさくふ子やしと年あす柏外
 え新中流ふあしと年あす柏外

芭蕉 古梵 風影 其角 文麟 去牙 一品 格通

大服ハ去年のまゝ糸の白ハ
 昔丹をまきまの九年、母とこ
 傘よ齒取りくもり久方、
 袖やうきく木の葉らきるる春
 ちくくくくむ糸やうつる大かこ
 曙をまの袖やたうみくら
 くらまはれくくくくくくく
 初夏や浪名の橋のくれく
 去りや志は法階きまのま
 万葉乃やくと隣は鳴りく
 己のくくくくくくくくく
 ちくくくくくくくくくくく

防川 昌翁 夕夜 梅香 池水 全 裁人 全 裁人 日 日 傍 般齊 貞室

初夏

若葉つむしはとと刻細
 花出くく摘みくくくく
 七葉をまきまのくくく
 女出くくくくくくく
 例深くくくくくく
 昔くくくくくくく
 石動くくくくく
 音も揺くくくくく
 初夏をむくくくく
 敷くくくくくく

越人 妙有 素秋 小春 越人 越人 越人 越人

梅おくあつらへん又も舟中
暮もやうとむ矢のすいれを
みのむしとまれはる梅の
冬松

洞代民家の息の道

夢のよよもとてさや梅の
うらひすのほそとまの
まればや鶴あうし
あつらへん又も舟中
暮もやうとむ矢のすいれを
みのむしとまれはる梅の
冬松

水

塵父

久文

芭蕉

傘下

以通

若

舟泉

傘下

梅

つきのうらと夏のぬきと
つきのうらと夏のぬきと

接木

傘下

曉乃拾瓶よあつるはくはく子 為子

曰

教保く膝氣のつらぬつをたて 卜枝

まき

くさるるをいせきるるくさるるを 備水

曰

まの白青ともや解くこと 筆澤

公尾

くさるるの尻つまきくさるるを 世子

塔井よまきあつるまきつれ 彦生

主即ちまき草つらまきあつる 毛助

すくくと教子摘りはくくく 母泉

すくくくくくくくくくくくく 其角

すくくくくくくくくくくくく 蕉堂

去檜やまきまきまきまきまき 梅車

川まきまきまきまきまきまき 冬文

はくくくくくくくくくくくく 吉江

葉草井よ人地子絶をまきまきまき

池よ絶あつる絶あつるあつる 素堂

風の吹方と後まき柳まき柳 井水

何よりまき柳まき柳まき柳 越人

まき柳まき柳まき柳まき柳 一笑

又まき柳まき柳まき柳まき柳 小春

すくくくく柳まき柳まき柳まき柳 一笑

くらりくく 後とさしむるやふまき外
 さよれも 後のかつらぬ柳外
 くらりくく 後のかつらぬ柳外
 吹風よ牛のこささゆく柳外
 吹風よ春うさすすのやふまき外
 うせふふぬむちのうまりの柳外
 ソとくしき世無路とまぬ柳外
 端幅よりみくく月の柳外
 まろ柳よりくくく通火車外
 引つきては泣くくくく柳外
 鳥れもさよれくくく柳外

仲春

麦のやゆれ葉のゆれくくく
 葉れもや枝葉のまふれあつてく
 ちりれ花のうたもふくくく
 けのさ花の畦くちのこれふくめ外
 うこくくもくくくく知くくく
 万葉集とは舞ふくくくく田外
 つくくくくくくくくくくく
 度う屋よ一本柳くくくく
 くらりくくハ葉子にくくく
 子れくくくくくくくくく
 うくくくくくくくくく
 さよこくくくくくくくくく

昌碧
 杏雨
 此橋
 杏雨
 松芳
 校遊
 為兮
 日
 素秋
 臨步
 生林

石海
 若和
 傘下
 法印
 玄来
 昌碧
 越人
 笑州
 除風
 一橋
 重松
 一髪

ころもくへかもしうしてつてくれば 扱 尻弾

古柏老人のちたがらりーわし山とらふ

香をさるゝあふひけふ文舞りくをる

とてさのね越人うりちりあをを志れ

うこつてつたそのは文舞りうり

あふ焼まもあふうー 扱 持

山路ゆく

たうあふこもくー 扱 芭蕉

いらうつらわら 扱 一井

折れま乃い 扱 越人

切うあつ 扱 不交

あふあう 扱 日 養

ひけいあ 扱 養

ひ 扱 竹

あ 扱 地

け 扱 養

上 扱 玄

枯 扱 生

妻 扱 林

む 扱 池

あ 扱 岩

も 扱 岩

く 扱 李

大 扱 東

おとりのよもつと拾ひぬ芥子此花 吉次

源川の宿まき

菴乃おも又しくくあつぬすもつて 野水 虎聖

仲交

あいのちを箱まきくく螢火 松井 元補

川草乃つるふく雲の宿はつるふ 一餐

窓らうきほ子とのほる螢火 不交

園兒よるしくき人呼量う舟 風笛

石細く逃もれぬ沢の量るぬ 喜江

あせのおも下とらうまは 雲う糸 倉帖

くさうり此神まきとわらぬ 柳う糸 卜枝

あはれくほる 此乃ほる外

くさうりこののくあせの秋芳

故乃おれと梅の一本の宿まき 小春

くさうりやふく梅まきあつる 杏雨

るれと此傘のらうまは 二水

故乃宿まき澄のくまは 一矢

薄のまきとけりる雲の宿まき 胡及

沙引く薄のまきとけりる 児竹

望伸くく姫る人鼻おれぬ 此橋

竹乃あふり籠さけくまは 長虹

筆此何れまきとけりる 去来

因に...
あ...
この...
あ...
波阜あ

あ...
あ...
あ...
あ...
あ...

あ...
あ...
あ...
あ...
あ...

あ...
あ...
あ...
あ...
あ...

あ...
あ...
あ...
あ...
あ...

あ...
あ...
あ...
あ...
あ...

あ...
あ...
あ...
あ...
あ...

先...
曲...
鴨...
松...
虹...
蒲...
押...
次...
夏...
菴...
す...
夕...
其...
甚...

伊よふ不の志をむハ人乃あしめど
夕鳥ハ故の鳴布よのくさか
山路亦く夕鳥入るふのかくハ
名ハる多ら海夕鳥入るくまを

暮夏

楠も動くやうく輝乃あま
もりの海接々あたるむあり
夕鳥入る傘めりて板橋ハ
夕鳥入る夜もやいぬ夜ハ
海一こよ白雨あくる入月新
簾一とく海一や名乃くさる日

杉も動くやうく輝乃あま
もりの海接々あたるむあり
夕鳥入る傘めりて板橋ハ
夕鳥入る夜もやいぬ夜ハ
海一こよ白雨あくる入月新
簾一とく海一や名乃くさる日
挑灯乃とまやう山一海一舟
さく一とまやう山一海一舟
吹らりくも乃くさる蓮一舟
蓮みむ月入るやまきハくとも
夕鳥入るくも乃くさる蓮一舟
何骨ふあ乃のちねあふれハ
くさくくとも山一松乃古きハ
すきまのくさく乃のけはは
連あまの侍もく法ふ志くハ

飛水
侍
山柳
夕鳥

昌榮
舟木
傘下
夕鳥
去来
日

如風
俊似
全
ト枝
未羊
秀正
晨凡
古梵
葉水
長虹
俊似
文瀾

引くもく馬よのすけりあつるハ
かゝりしを流るる意の志のハ
虫をぬぐりて結ぶ志のハ
虫や幕とぬぐるて構花
種のおはるにけりりるの路
綿乃死を西く榮に似るハ

初秋

ちうしる中庭るあしの秋の風
栂の葉やあつる人様の風

雲の西雲のちうしる

一葉散るる一ゆきまじりし
仙化

澹月

尚白

一發

枝

越人

素堂

越人

圓解

うさひのちうしる秋の夕ぐしき
穿くとき雨を早のち向外
朝白の海をさしぬさうりる
暮や城下のまじりる
あさうの白さのあはれぬ

方生

杏雨

芭蕉

文鱗

翁子

秋風とてのちうしる
隣るれあさうは竹ふりり
あさう不やひくこの水は流る月
まあうりるあはれりやあつる
秋風やまじりるは強き人
涼しきをなすより泊鱸うか

日

鷗歩

胡及

胤輝

去来

昌長

睦乃ふふ高物とてゆふりあそぶ
まつりし一通りはよりゆふりり
まろくを燈甚清くゆふりり
わのこまき猫つまを伝ふりり
ふふつ戸やまのよふより西
ふすれそとわくそつらや萩の花
ひまろくくとやあつりや女の花
棚作のそとをさのきき蒲葺
すえまきわく帟燭とふらなる
新くや燈よそつらんけしる

素堂は所のしとよふ

一髪 素秋 芭蕉 其角 舟泉 芭蕉 作者 不知 任口 荷守 胡及

とてし乃ぬる根よとてき
とてし乃ぬる根よとてき

仲秋

かれ南ふ鳥のとゆりり秋のそ
つとつとゆとる秋のそ
谷川やそあやそと秋のられ
石切の音しゆりり秋はれ
芥乃のちや堀堀ゆり秋のそ
麻のそよふ人乃白らり
田と細とけつらんふの正業
山姥の麻路のゆるり
紅をちやとたつとくはる

素堂 俊似 芭蕉 如 小春 益音 傘下 一枝 一髪 伊原 一泉 其角

去ぬ人よ 袖のしるし 紅葉も
萩の中よ 紅葉も 枝は
しるし ゆく 地も 草の
つらね 秋乃 宗和
取れせん 秋乃 枝は

い守乃 女のおけつ 蓮の
一本の 芦の 穂 彦泉
わの 舟の 舟 胡及
いし 舟の 舟 暁龍
舟中 舟の 舟

関乃 素牛 舟の

いし 舟 孫とや 其角

舟の

いし 舟 孫とや 芭蕉

いし 舟 孫とや 加賀 笑

暮秋

いし 舟 孫とや 巴夫

いし 舟 孫とや 昌碧

いし 舟 孫とや 越人

いし 舟 孫とや 暁龍

いし 舟 孫とや

かきつゆのひまきとつるせきやあの花 其角

あつゆのつゆの人やあ貴帽子 日

くわよあつてあ体やわりのり 二水

あつてあつてあまのあまのあ 伊豫 千代

あつてあつてあまのあまのあ 濃河 芦夕

あつてあつてあまのあまのあ 加生

あつてあつてあまのあまのあ 路通

あつてあつてあまのあまのあ 初冬

あつてあつてあまのあまのあ 湖春

あつてあつてあまのあまのあ 尚白

あつてあつてあまのあまのあ 満水

あつてあつてあまのあまのあ

溪乃よあまのあまのあ

あつてあつてあまのあまのあ 其角

あつてあつてあまのあまのあ

あつてあつてあまのあまのあ 芭蕉

あつてあつてあまのあまのあ 加賀 一笑

あつてあつてあまのあまのあ 暮秋

あつてあつてあまのあまのあ 巴夫

あつてあつてあまのあまのあ 昌隆

あつてあつてあまのあまのあ 我人

あつてあつてあまのあまのあ 曉鏡

あつてあつてあまのあまのあ

あつてあつてあまのあまのあ

かしらけのふきとんやまのた 其角
 萬世つゆ洲の人や似貫帽子 日
 けふよあつて身伴つてけりひらり 二水
 かしらけのふきとんやまのた 伊藤 千園
 淋しきと櫃北実茂のぬえ外 濃辨 芦夕
 秋のまあとのうらなれや梅りまき 加生
 其乃の梅やまのくまきうらなれ 路通
 初冬
 あせつららぬかゝりてさゆの耐ぬ外 湖春
 一和もくく二舟きくく三和耐る 尚白
 とうらなれぬわりのゆれこ乃り 湍水

鳩とせくなくく力をも面あき 我
 あと漬の大根ひくふ月夜外 俊似
 仲冬
 かしらけのふきとんやまのた 日 務吉
 淋しきと櫃北実茂のぬえ外 日 金治
 秋のまあとのうらなれや梅りまき 李雨
 かしらけのふきとんやまのた 宋之
 淋しきと櫃北実茂のぬえ外 杜國
 秋のまあとのうらなれや梅りまき 揚吉
 かしらけのふきとんやまのた 俊似

ついでにうききたり 扇氷
赤乃々々何々々 多に遊程ハ
秋舟

兼形三舟

情よりなる舟家とらむ 橋本外
如くくくく言舟は常るにきく
あふふふふ名舟は常るにきく
る舟よりなる舟川出れ乾うふ
名舟引や健むとあふふふふ
つぐぐくくくく名舟乃く名法外
名舟や神日名鴨赤うくく
舟くくくくく名舟くくくく
新鮮さくくくくく名舟くく

嵐
舟
一井
名
忠知
龜洞
村俊

井とあふふふの六月さく

兼形く男ハ冬裸あり

汗中くく谷は冥くむ氷室外
海風揚乃く壺埋りく水むら外
炭竈乃穴ぬくくくくく
膝筒をけくくくくく
火くくくくくくくくく
いつてりくく底起せはくくく
あふふふふふふふふふふ

歳暮

餅つくくや内くくくくく
昔々くくくくくくくく

李下
尚白

冬松
利生
龜洞
一矢
龜洞
昔々

かりん 花の 後さす たる あり 際
 くる 迎く 櫓つ くる 舟 共 知り
 煤 くる 火 梅よ けり 飄 けり
 本 芳乃 月 くる 人 乃 ち けり
 とい 梓乃 実 ち けり けり 年
 の 子 とも けり けり けり せん
 と けり 乃 くれ 柁 の 実 一 つ けり
 門 東 とも けり けり 蛤 一 けり
 田 代 乃 氣 けり けり けり けり
 一 隻 一 隻 一 隻
 一 隻 一 隻 一 隻

雜

年中行夏内十二句

供看 蕪白散

いんけり ちや けり けり けり けり けり

ま 白 ぶ ぶ

けり けり けり けり けり けり けり

石 清 乃 臨 時 祭

香 乃 ち けり けり けり けり けり

灌 佛

ちや 乃 ち けり けり けり けり けり

端 午

けり 瘦 けり 葵 乃 ち けり けり けり

施 茶

けり けり けり けり けり けり けり

あき

乞巧奠

ついで葉のうらとせりてさきもさくよき

約迎

爪の髪も旅乃すくしやうむむく

撰虫

まの髪や足乃切れらるきり

十月更衣

巾しきれ衣えしきうぬり花

お節

舞姫の髪をむ指を折ふり

追儼

はしれらるる服はらうき鬼の面

詩題十六句

今日なき計計舎春風を水二時来

水乃一海の海とあるまの風

白片落梅浮涸水

さうさうのうらけけは梅白

春の女伴閑遊女

花を賣らば多きけのうらけ

花下忘帰る因景

麻入あぐりしめけしは花の下

留春春不留春婦人寂寞

あまきりくくく乃乃ゆき

巖風吹袂衣不穿履不脱

綿脱と松の葉のさびしき

池咲蓮芽附

蓮乃まもりしあきまのまふ

暑月貴家何処有客来唯憶北窓風

涼光よく切ぬるまのり北のす

大底四時心總苦就中漸腸是秋天

古の旅とまのりしあきまのまふ

秋乃雨とれぬ瓜と人ふ

秋乃雨とれぬ瓜と人ふ

金之鐘漏初長夜取く星何欲曙天

残影燈用牆斜光月穿牖

福の葉やほろり白の月の

万物秋を能く壊色

心も葉もまろりてふと秋乃ま

十月に南天を製せ可憐を景似春花

二のりもまろりし息づく小ま

寂寞深村夜残雁雪中回

神さよびもまろりしやまのり

白頭赤袂佛名經

佛名乃れは腰懐く白髪うね

後園乃摺ひのこし影り

録籍

目立 かくらふ乃りまのりしあきまのまふ

再表

付木実 あくく園あり鶯をよけし人乃家
釣瓶 濁井 出るるさや水のくくよふ秋の里
糊賣 あきあきのまゝあうねむつくもく
馬糞搔 こかりの松虫あふきとつとまて

李夫人

魂在何許香煙引到焚處

かけら乃抱つてくつろくろくろく

楊妃

雲髻半偏新睡覺花冠不整下堂来

くろくろく半ゆきくくくく梅白く卯

昭陽人

小頭鞋履空夜堂裏青黛點眉々細毛

介人不見々應笑

もの粧奇やびりくくまの候あらん

西施

宮中拾得嫁眉芥不缺君と是愛君

花あうく粧くらくく牡丹く時

玉脂君

玉糸風沙勝畫圖

とれあふもまきくぬぬぬ乃柳所

一目あきくくくくくくく

病やの故や山柳依燒火をせくわ

社あきん侍書乃あきくくく

溝釈乃眠くくくくく扇く卯

物吉

越人

午 水乃りりし屋宇上を踏つとも
未 隙乃きふ氏家乃夕合さるり
申 申月乃や新しむらさしゆり

西よあまて生と多川多き程は

山 獸 糸留乃止通とつらぬあしれこよ

柑水

世 鳥 鴨突乃以新湯き日あし式

児行

里 虫 枝あがし虫さしむけ蜀漆之ぬ

合帖

海 魚 朽りしろと 編引りり盆乃月

全

川 魚 秋乃曾 持川くの大ぬり式

合帖

牛馬四足是謂天落馬首穿牛尾

是謂人

一乃を枝さく 桃乃纏木うぬ 裁人

藏舟於壑 藏山於澤 錮之固形而

夜半有乃力者負之而走

かゝるく作走乃ちうらさる

後聖之棄知大盗乃止

七夕と抱子しこちきむく

鏡者天

散るくはなふさりのハ花火うぬ

桂文

紙者未

勢既の寄るくはるさねら那

多山

系房

けくきんひやんか時を去りたり

一井

作虫

ふくくく人ふみくく新くぬ

長虹

一休

ひくく乃乃くくたりくくや乃乃雲

端水

法然

ひくく乃乃はくくむくくさくく水

端水

山岩

たく山くく敷くく減くく岩乃角

端水

海岩

草くくくく一はくくく土くくあくくりくく

全

名所

八きくすくく奥くくくくくく田く

杜園

くくく奥乃骨や或くくく大江山

吾々

かくく清くく松くく花くくりくく膝くくく

芭蕉

葉一担くくくくくくくくくく海波くく外

端水

候候ゆくくくくくくくくくくくくく

吾々

院遊橋眺を

多殊くく鬼嶽くくくくくくくくく

合吟

園くくくくくくくくくくくくくく

合吟

くく徳園くくくくくく乃乃山くくく

くくくくくくくくくくくくくく

芳中くくく布子巻方くくくくく

杜園

妻くくくや内和くくくくくくくく

吾々

くくく雨くくくくくくくくくく

芭蕉

湖乃くくくくくくくくくくく

去来

牛もやしき相のわらうの五月西 一袋

角田川あり

いさしのりれほほ乃新食生知を 真室

みくしーのわいふ秋を貝乃言 假室

いさしひひまここししと乃部六 芭蕉

夕方や杖ふあつた角田川 越人

九月十二日

唐歩ふ富士あゝとく乃有るを 素堂

鳴突乃るるやととるの多的田外 胡及

鳴突と草は乃あふのむまを以 淵支

武勇ややくあふも竹を色 舟泉

湖をを想うくくをん村くれ 尚白

かし海やとくうあをく妙時ぬ 洗友

ひさし種とねりてくまの目あり 洗悪

絶つしと生海氣と焼や水の真 俊似

や乃富士とややとくはのり 一笑

くし山と生大まのりたのり 湍水

星橋乃やととるもやのり 舟水

あさ乃りや石破の中家の様持 芭蕉

旅

雪多雀より上くやとく小峠の那 如行

大和ふ平尾村く

花乃陰淫く似く旅ぬるが 芭蕉

全

梯原里と眠るく通るりり
 日乃入や毎ふくち桃の葉
 のしりや湊乃豆の生さう家
 出し何脱くくくちおおえ
 ある人の鏡あや
 けしきん涙をきて笑たり
 森のぬふ食焼者や明やとき
 ぬとくちくちらん水明る旅森が
 めくくち柱目と出り市の家
 夕まよその大名り一ちけり紫
 芭蕉とて
 稲妻ふくくちつまきくち別り
 夕名

夕楓

一袋

荷子

芭蕉

除風

手松

昌碧

松芳

傘下

ちきんくち秋乃輝
 わき風よーのくちれは
 抱くくち秋乃かあま
 芳くちすくち松よんぬま
 くちあまけくちむくち
 文級乃有々二人よくち秋乃り
 越人旅まきくちまきくち
 月より服持つてくる乃くち
 ねくちれつねくちつてくちハあま乃秋
 橋乃言まはれくちらり秋のつ不
 物冊箱とらふお其角乃くちむけ
 ぬくちれくち

一井

舟泉

舟泉

嵐洋

越人

舟水

芭蕉

踏通

荷舟橋より麻を束ねて秋の山
 とほりく編みたるも習り
 入月今ちきりしりてまると
 能きけと親きやう川まぬさ
 品川まきく人よまると
 澤菴乃乃墓をまこれ乃秋の暮
 牝枕むもちりりあさ乃多
 旅ふれぬ刀うこてや村一これ
 鳴海くく芭蕉まなま
 しくそるまこれし種ほらひ
 まええ一羽織を編乃又より
 其角ふわりし時

荷舟
 京ら
 去察
 一井
 文鱗
 芭蕉
 津常秀
 荷兮
 此水

わありのひりりきりりるの若
 天鼓くくこれあまき乃き
 うう尻乃るまよくゆくふる
 里人のこくくゆく乃き
 裁人と吉田乃澤ま
 きりり二人旅ぬまありき
 旅森くくそくや浮世の煤拂
 述懐
 澤菴河橋く物
 きりりりりりりりりりりりり
 りりりりりりりりりりりり
 余は乃田乃世はぬく浮世は

若多
 越人
 傘下
 宗因
 芭蕉
 日
 芭蕉
 結通
 世宣
 法橋

この世のうら

若くはよなきと恥ぢり身乃の成
根をくわわくくくくくくくくく

杜園
梅舌

高州のうら

又母乃志とくくくくくくくくく
あやめとくくくくくくくくくく
さくくく入湯とくくくくくくく
一斗乃志とくくくくくくくくく
看多を張子とくくくくくくくく
似くくくや白也とくくくくくく
九乃十目とくくくくくくくく

芭蕉
為今
曰
杏雨
杉風
龜雨

かぐれとくくくくくくくくくく

嵐吉

この世のうらとくくくくくくく

堯緒

人乃のうらとくくくく

これとくくくくくくくくくく

芭蕉

四里の人よとくくくく

この世のうらとくくくくくく

杜園

縁合とくくくくくくく

この世のうらとくくくくくく

戒人

あさくくくくくくくくくく

一巻おとくくく

あさくくくくくくくくくく

荷了

古くくくくくくくく

あさくくくくくくくくくく

氣弾

梢乃やふ靴子とてさだに候收か
川や遠く一舟やらうとてさだに候
ゆふさゆふや脈乃結ふ往年乃昔
さあへのさしとてわりの心の香
起すまゝにては實先よりわらふ
ゆふや親よまゝとてわりの心

恋

まの舟よふあゝ人の妻息外
まのめくや余れとてわりの心
ゆふや親よまゝとてわりの心
ゆふや親よまゝとてわりの心
ゆふや親よまゝとてわりの心
ゆふや親よまゝとてわりの心
ゆふや親よまゝとてわりの心
ゆふや親よまゝとてわりの心

去来
西武
芭蕉
除風
越人

一者妻

除風
長虹
文圃
ゆふ

さしけりめ 婦人泣きさするるり
心棘

恋

さる園乃 梅妻清きや月の光
一免らで人侍のゆふとてわりの心
さしけりめ 婦人泣きさするるり

長虹
尚白

つまらぬとて家もわらわ女も花
まらぬとて家もわらわ女も花
妻乃よふのあゝとてわりの心
松の中 時多 旅乃とてわりの心
おとらひ火燈をゆふとてわりの心
ゆふとてわりの心
山畑よりのゆふとてわりの心

荷兮
小春
越人
俊似
無泉
嵐菘
松芳

まゝぬくとて歌へんて居るなり
むらさきやまゝぬくの比神さ
昌碧

無常

末期

あゝとて南を河海流しつり
守武

母と少く思連

あゝとてつゆもなききり
傘下

末期

あゝとて空しくも月のほろも
坂 元順

松坂の浮瓢とつよ人のすまう

あゝとてつゆもなき

橋のりつゆりあゝとてつゆもなき
荷下

あゝとてつゆもなき

あゝとてつゆもなき
京 去来

あゝとてつゆもなき

あゝとてつゆもなき
後

あゝとてつゆもなき

あゝとてつゆもなき
母水

辞世

あゝとてつゆもなき

あゝとてつゆもなき

あゝとてつゆもなき
落梧

あゝとてつゆもなき

あゝとてつゆもなき
石

妻の遊音

とて飛下りての里人をねらふ心 自悦

木の下の妻のこまなりしとて

浜うまひやわたりての心よとて 玄来

コ新牙まかりし後

その人を斬る人形に秋乃とれ 其角

あはれなる子のまねと

けさふるやむとての食らふ秋の音 尚白

あはれ人の遊音

埋むたもまじゆやあはれこのまねる者 芭蕉

旅をくみまうりたる人

あはれ人の遊音は清よたり 龍潭

その世母よりあはれ人のあはれ月 かた 小春

釋教

何舞ふ

神垣やけの山もけと温經巻 芭蕉

肩をくくると母むらりし縁え像 龍潭

西行上人五百巻巻よ 龍潭

そのまじりしとての明証よまじり 龍潭

何舞ふ 遠馬

連翹やまを白とてちりけり 胡及

うつくしき道の葉うつくしき 杜若

本履をくけしとての雨乃花 杜園

はりの心をくくるとての乃寺 冬松

衣と多て又とれり一付る 嵐障

鎌倉の安国端さふく

たぐしとりの波や直さ水と人 越人

古寺乃る名

曙や如 藍くし乃る入る 露分

日

香粉やうくくニま乃片腕 俊似

つくりと動くこいせれや 香粉 一井

船森すく人のさるや 船くき 文洞

千観りるもかせりし 舟のくれ 其角

華と品七句

如多る者は中

まの 白まむめの髪と白くまふ 胡及

如保者得衣

ちを乃るや 馬は松よあまの家

如商人得金

双六乃るゆてよむむつゆを成

如子得母

竹とくしおけととらくさるは

如後得船

月乃は津乃 板本きるまらり

如病得醫

かぐくしき法とる人たふ山と

如暗得燈

秋乃秋や秋のゆくとき記さす

神祇

古多や雪志りりる柳子既 瑞雪

二月廿五日 壬午

初さしきや花乃乃月の梅 花分

志んくしと梅ちりりる春火火 花

常もああやこそ 神乃梅 龜印

上下乃さきしぬやうに神の梅 昌碧

燈のかきりあふり梅乃中 瑞雪

何し中しれりやをきし梅の花 越人

常しれくあは海くさる神の梅 舟泉

春代も志りりるや梅乃春 雨村

門あまし梅乃瑞雪れりみり 壬午

給りりりる人の後乃さあしり 壬午

若し若く齒牙かきりりる社火 純可

ま乃後川後りりるさあしり 李桃

あまの原の本は乃中の柱りり 好葉

けしきは神楽の中を通りり 壬午

まも乃灯とりりる大串りり 龜印

破扇なるふりり後りり 未学

川系連瘡まきりり後りり 荷言

こつししや里乃子歌神輿りり 尚白

此乃乃まは秋さるあまの油筒 松芳

あまの海海宣乃さる油筒 落格

若子納

きくきくぬきぬき神々
江乃方とて條多とん次
の神系外
於麻川和乃旅
在神系外
四つくきれ神中
とてとてとて
移祝や此後くく
とてとてとて

利重
丹水
昌碧
村俊
卜枝

祝

肩付とくくふあうぬきぬき
若子納
貴子と竹と
神系外
若子代やとくく
とてとてとて
若子納と
仍和ととと
とてとてとて

冬文
若子
載人
率下

いきくくくゆきぬき
乃上と枝つとん
子代乃祝
にゆきぬき
とてとてとて
若子納と
仍和ととと
とてとてとて

若子
日

先祝へ
梅とと
乃と
若子納

若子

Handwritten text in a cursive script, possibly a list or account, located on the right page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, enclosed within a rectangular border on the left page of the manuscript.

曠野集 負介

銀の光をねらふ人さへやまされりや
ありてはれめりききさるる舞のあま
四角の舞舞りもさくは乃さるるに
とんてんてんてんてんてんてんてん
あまあくとんてんてんてんてんてん
妻喰いしなととととととととと

此の尾端乃母木子乃作と芭蕉
公和の侍と一をせよとてんてんてん
比田神人君ととととととととと
感さむりーあやうとととととと
に虎乃捕はせーとととととととと

あうて雅色を妻ーとととととと
おやあうーととととととととと
あうとととととととととととと
と實乃字若杜あうととととと
程厚の白ととととととと

素堂

妻をとりしれ舞のあまあまあま
この文人のつとつとつとつとつ
一とととととととととととと
とととととととととととととと
槎の路もとととととととととと
た乃とととととととととととと
門の石月信周乃とととととと

越人
水

火坐有のんひてふのあつさこし
らんをのりせんと人のまうら
あせさしとみく池のかくしと
るさうきふ静もりまこと定らん
たしくまぬるまか味は茶
まるとあつさ月とらんわとれつ
大根さしとく行らん

龜雨

遠海や海志夫は湖とる
はるれあらん海乃あつさ里
のとりやあさ海と解く
百足乃懼る茶とくは茶
舟水

夕月乃雲の白さとくら編
あさ乃雲と編よ引させ
一法とて是も古綿
そ乃あつさまきし宜祿の麻
糸とれはし杉あふ年景
いつともあつさふ藏造
湯なまらぬのそあつさのこ
海一やと定らん川乃端
さしかされしや千は月
秋風よ女車の舞はるこ
神もあつさるる法輪

舟泉
海
龜雨
あつ
湯
舟泉
海
荷
龜雨
神

時くふみのたふくぬ花の
八重山吹のさくらあはれ
日のくさやうふい何せん暗き
をやとけしむぬふり
向きて実なるやのあひ
垢離く人乃こゑのれ番
配所ゆて千真乃加減ええ
あうとよとよのちとく
ひく新よあつひつと
ひく新よあつひつと
ひく新よあつひつと

昌若 妙水 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉

さむりて... 下戸の月
やうと秋乃やあつとあは
つとくもあつとあは
あまねいゆき安房の小湊
友のあやあつとあは
桶乃あつとあは
人多くあつとあは
ついとあつとあは
あつとあつとあは
あつとあつとあは
あつとあつとあは

昌若 妙水 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉 泉

せしめしきやうし又ゆる月影
 秋草乃しとくもあきと経嘆こしれ
 弓ひきこもるる勝お撲とく
 けしよも赤その拾ひゆととら出
 ちりりく砂乃中乃木乃て
 火嵐乃枝のちとるゆとく
 候えせしとくしつ急りし
 ちりりり鳴くしととるゆとく
 海乃しゆよ獲とらとくちりり
 姿と年かたけれもせんちりり
 ちりりくみ時乃繪を先よとく
 ちりりりちりりちりりちりり

竹兮 松芳 舟泉 松芳 舟泉 松芳 舟泉 松芳 舟泉 松芳 舟泉

月乃影や赤き井乃 松
 灯よとくとけりしつととれ風
 散珠くくしりく船息乃く
 時辰も入湯は赤の志ハく
 十日のまきく乃けりしゆとく
 山里乃秋せつしと生駒
 ちりりかちりりちりりちりり
 さしりしとちりりしゆと月の新
 馬乃しとちりりしゆとつとく
 さしりしとちりりしゆとつとく
 楚ゆとつとちりりしゆとつとく
 つりりしとちりりしゆとつとく

舟泉 松芳 舟泉 松芳 舟泉 松芳 舟泉 松芳 舟泉 松芳 舟泉

あきつゝあき雨乃降中
歌分獨在鎌背まのり
うと秋立乃と家ちくひり
灯其乃油をちえ押く
白とねをせまきりくさ
あし風は急のそら葉のあくと
半ハこころん落やれ乃秋
むつくと月を影の秋よ似
人の懐まにく川くもれ
にきりく瓜や直せあひ込
テせぬま乃ころく山田中
わろくく小法乃者の屋付今

はる月まよハ 念佛 人

百あもらういあを衣まま 下
田 雲きくはく 振出 人

源川の歌

原うのまらうとすまうとひと
あまああよよこの比の月
あまらぬ波家鹿のそつん
あまらぬあれくさ秋のあれ
飄葉乃大まきさるんや
風まらうれく帰る 市人
あまらうとまあは是れ利の地

越人 芭蕉 全 越人 全 芭蕉 全

さいしあうし文字間からる
いりく瓦底乃木葉や
龍走まると子の禮えくひまき
年の比波ら義まうしやう
田中ーとうくく照きくらち
蕉人蕉人蕉

翁座方てぬてまふの楚りま
若きま上若字の文や天傳丁 其角
三也さの内足西空をりりり 楚人
菊萩の庭まきをりりりて 全
飲くくくくくくくくくくく 全
水くまくくくくくくくくく 全

歯きまくりまきくくくくく
服まくくくくくくくくくく
静まゆまゆまゆまゆまゆ
空揮の離魂の歌乃れをりり
あくとまうりりりりりり 全
いこやまき子と他人もくくく
やりとまき子と他人もくくく
酒壺さきまきまきまきまき
魚つまきまきまきまきまき
そ笑いらぬ富士に儀考まき
存くまきまきまきまきまき
饅頭まきまきまきまきまき
全角全人全角全人全角全人

らひあひのく牧まうらぬ果のる
川越うれを 塔下のこち
菴瘴魚の透とるやと齒の白き
唱子ハあしん声あそりやる
ふくこみるこあれくのたまきま
後そひふくこつふくこつふくこ
とねふくこゆあふくこつふくこ
竹燈をらふくこあつる浪人
恙物を獲ふくこつふくこつ
唯月の聲あつるこ月の月影
あつるあひ群てはあつる女宮
つぎふの医者者乃後海や

全 人 全 日 越 人 越 人 越 人 全

らふくこあひあつるあつるあつる
ゆふこつふくこつふくこつふくこ
初もあつるあつるあつる相のあ
日のあつるあつるあつる乃新苑
山川や勢の喧あつるあつる人
勢を遠りあつるあつるあつる
乃あつるあつるあつるあつる
あつるあつるあつるあつる
川越乃あつるあつるあつるあつる
あつるあつるあつるあつるあつる
あつるあつるあつるあつるあつる

越 人 越 水 全 日 水 水 水 水 水

とけきあふ比のうきくひ
あふ秋乃陽とむらと水飲て
くらくの影とあは佐老倍
峯乃まおらふあつと又知り
旅とまぬららのんま聚集と
亭とま子あやれとまも一文と
下片ハ皆いく月のねをるき
耳や壺やまうくも花のねをま
るま是免さむるより初年
いつやしも書さぬ此はくは
山伏修へ人まうはあしり
くらしくとくらむぬけと車

梧 水 日 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧

〇一十四

挑行りるくは園をさく種
何とすとほらん髪と髪おあし
志うくおとつとぬつれあさ
とらうくはやう馬まうきのま
りくは府中へ船あはまら
雨やまう雲のらまうて面心や
柳あらうくも例の遊る
新さうく内をまさつれみする
寂しよは秋と女夫弄まらり
ちま上よめあまらうくもま
茶もあうくやはいあへる酒
知つとの子も真徳らうくも

梧 水 梧 同 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧

流るる乃らうらうらり流るる
流るる乃らうらうらり流るる

水 枯

一里乃山原をとりつゝ
かきひのまの瓶水多
はきくさや西をとりつゝ
そなたをとりつゝ
夕月の入きは早き
たのらに錦とつゝ
里原く流るる
玄日く妻をとりつゝ

一井
胡及
一井
一井
胡及
一井
胡及

向りれても流るる
着るる乃らうらうらり
うらうらりと流るる
さゆゆく流るる
たのらに錦とつゝ
蛤とつゝ
浦風を吹く
みるもかきひの
さゆゆく流るる
蒜とつゝ
けのらに錦とつゝ
流るる乃らうらうらり

一井
胡及
一井
一井
胡及
一井
胡及

いふしむる世なるいふと候
そをぬかすある故をさゆり
亦んさくはあはるうあじ松の枝
秤よりゆる人くし乃奥
けと平よりうを灸の跡あき
漬くもせむるつゝ森入月
そむるく陸子乃陸のうとそむ
こむくく陸中うとあはむまぬのく
陸のく候入さのま乃んふら
衣引うゆる人乃は音
毒ありと瓜一きれと喰ぬく
片風もあらくはる白雨

荒澤 一井 古也 胡及
荒澤 一井 古也 胡及
荒澤 一井 古也 胡及
荒澤 一井 古也 胡及
荒澤 一井 古也 胡及

〇片十六

板をぬきく踏ふふと危乃内 一井
いひ乃あけく思ふと危ぬ 荒澤
ぬくくは目と乃あはる荒澤 古也
又りくあはるくはく 胡及

仇借云尔波抄

北邊大入合技 有國裁 今部六冊
七部集のくく乃子あはと形歌くまてん波の
そをくくくくく

歌歌歌歌白集塔塔選

五冊

新百負

文家十一
支考

一冊

華實年浪州

十五冊

合類大節用集

文字五示和僕乃
法之と考く加
十三冊

芭蕉公氣古郷傳

有國技

孫初冠のひより晩年ひるまのひり状と考く
ひりひり候陽ひりひりの附合文通る編四巻の
呂そお候てひとあむ
二冊

安永三年甲午土月發刺
文化五年戊辰土月再刺

皇都書舗

野田治兵衛
浦井徳右衛門
筒井庄兵衛



